

冬の花 — 紅魔館の年越し —

一 鐘の音

遠くからごおんという重い音が響いてきている。

十二月の末の夜ともなれば空気は冷たく澄み渡り、鐘の音が遙かな距離を駆け抜けてくる。

博麗神社に設置された大鐘の音だ。

実際にはここ——紅魔館までは結構な距離があるはずで、本来ならば聞こえるはずもないと思われるのだが。もしかしたら何か特殊な仕掛けでも施しているのかもしれない。

百人の煩惱の数と同じだけ打つという除夜の鐘。それが聞こえてきた時、まず興味を示したのはフランだった。

微かな音だったけれど耳聴く聞きつけた彼女は、これが何であるかを咲夜に訊いた。

咲夜が除夜の鐘のこと、そして今現在の博麗神社は軽いお祭りのようになっていることを教えると、興味は欲求へと変わった。

「神社に行きたい！」

一年の終わりと始まりが交差する大晦日。

世間的に特別な日というのはフランにとっても特別であるようで、そんな日にお祭りがある

というのを知ってしまったのは、我慢など利くはずもなかった。

特別な日にお祭りに行つて鐘の音を間近に聞き、屋台を巡り、たくさんの人と出会う。それは紅魔館という小さな世界しか知らぬフランにとつて何よりも魅力的に映つた。

どうして今まで黙っていたのかと怒られもした咲夜だったが、そこは冷静なメイド長。流石に今まで地下室に居たのではそこまで音が届かなかつたと説明。ただそれだけでなく、フランが良い子にしていたから今では外に出ることも叶い、こうして除夜の鐘を聞くことができたのだと、良い方向に解釈させたのだ。

そしてこうなつたからにはフランは止まらない。鐘の音を聞き、外に出ることも許された今ならば神社に行つても問題はないだろう、と。

咲夜が経緯をレミリアに相談すると、最初は渋っていたものの、最後には折れてくれた。

レミリアにとつても大晦日、元旦というのは特別な日であるという認識はそれなりにあるらしい。イベント事にも似た日ということで、紅魔館の主も多少なりとも気分が昂ぶっていたのかもしれない。

「ま、今日くらいは大目に見ましよう。その代わりに、行くのなら全員で行くわよ。それなら例えフランが興奮して問題を起こしても全員で止められるわ」

「かしこまりました。それではパチュリー様と小悪魔、美鈴にも声を掛けてまいります」
そう言つて皆を集めに行つた咲夜の足取りはふらふらと頼りないものだった。

それは、ここ最近の彼女の多忙さを物語っている。

紅魔館ではあまり関係の無いものだったが、世間一般の常識というものは無関係を決めているところまで影響を及ぼすものだ。

一年の汚れを落とす大掃除はメイドとして見過ごせないものであつたし、正月は里の店が休みになるので食料や日用品の買い溜めもしなければならぬ。

そういつた諸々の雑事に追われ、彼女は休む暇もないくらいに働き通しだった。

特に、一年の最後の日となる今日は朝から本当に休憩を挟む間も無かつたのだ。

二 大晦日の朝

十六夜咲夜の朝は早い。

日も昇らぬうちから働きだすのはいつものことで、自身の身だしなみはそれ以前に済ませている。そもそも夜行型の吸血鬼であるレミリアに仕えているのだから、一体どうやって睡眠時間を確保しているのか分からない。彼女の周囲だけ時間の流れが歪んでいるのではないかと思ふほど不可解な生活である。

そして、このような生活は日常であり、今日は年末——大晦日。

いや今日だけでなく、年末という忙しさからここ数日はほとんど寝ていない。

“今日”が何時から始まったのか分からないまま、咲夜は大晦日という日を迎えていた。

「ふあゝあ……。咲夜さん、おはようございますー……」

「おはよ、美鈴。相変わらず緩んでるわね」

「そりゃあ起き抜けですからー……」

「あなたの場合いつものことでしょう」

「いえいえ。そんなことはないですよー？」

紅魔館のダイニングでは朝食が供されていた。

ぴしりと身だしなみを整え、しっかりと朝食を用意していた咲夜とは打って変わって、本当に起きてきたばかりらしい美鈴は服こそいつものを着用しているが、髪の毛はぼさぼさだった。

「寝癖くらい先に整えてから来たら？」

「なんだかお腹空いちちゃって……」

「寝起きでよくすぐにお腹が減るわね」

「それだけ咲夜さんの食事が魅力的ということですよ」

「ありがと」

感謝の言葉を述べられているものの、咲夜はあまり相手にしていない。まあいつもの遣り取りなのだ。いくらかは本気なのかもしれないが、寝惚けた美鈴の言葉を真に受けて喜ぶほど咲

夜は暇では無かった。

そんな連れない咲夜の方をぼうっと見ながら美鈴は感心したように言う。

「咲夜さんこそ毎朝すごいですね。私なんてストリートだから割とブラッシングするだけで済みますけど、いつも三つ編みきっちりしてますもんね」

自分の髪の毛をいじりつつ、未だ半開きの眼で咲夜の方を見る。

自覚があるらしく、美鈴は自分とのあまりの違いに改めて感心しているようだった。

「あなたの毛は柔らかいからいいわよね。私は編んでるのもあるけど、クセっ毛だから大変なのよ……ってこんなことしてる場合じゃないわ」

美鈴に倣ってくるくると自分の髪の毛をいじっていた咲夜が慌てたように自分の懐中時計を確認した。

「食べたら食器は水に浸けておいてね」

「はぁーい」

それだけ指示すると、咲夜は早々に出て行ってしまった。色々とやることが溜まっているのだろう。いつまでも美鈴の相手はしてられないということだ。

「働き者だなあ。身体壊さなきゃいいんだけど」

朝のほんのひとときでさえも、なかなか話す時間が取れない。咲夜の多忙さは知っているつもりだったが、自分が思っていた以上に最近忙しいのだと、ようやく覚醒し出した頭で言

葉を漏らす美鈴だった。

眠気を覚ますように目を擦りつつ、去って行ってしまった咲夜の身を案じながら、美鈴はもそもそとパンを口に含んだ。

大晦日だからといって通常の業務をやらなくて良いというわけにはいかない。

もちろん、年越しに備えた料理をはじめ、諸々の準備もあるけれど、それとは別に毎日行っている炊事、掃除、洗濯は当然のようにある。

今もこうやって美鈴の部屋の掃除を行っているところだ。

「今度から自分の部屋くらい自分で掃除させようかしら」

ぼつりと愚痴っぽく漏れてしまうのも仕方ないことだろう。何せ、やってもやっても仕事に片付く気がしないのだ。普段は文句もなく、当然の業務としてやっている掃除も、それは誰かに頼みたくもなるものだ。

とは言え、美鈴の部屋はまだマシな方だろう。

いつも外で門番をしているせいとか、実はあのぐうたらした性格の割に部屋は綺麗なのだ。

清潔・整頓好きというよりは、単純に物が少ないから散らかりようがないのだ。

咲夜は床掃除、ベッドメイクを済ませ、鏡台の水拭きに取り掛かっている。

「ごしごしと前後に動く雑巾に倣うように、咲夜の身体も僅かにゆらゆらと揺れている。その揺れに乗って、するりと耳の裏に掛けていた髪の毛が数本垂れてきた。」

「……………」
拭き掃除の手を止めて手でもう一度髪の毛を耳に掛ける。

無言のまま拭き掃除を再開。

今度は数度雑巾を往復させただけでまたしても垂れてきた。

「……………」

「どうしてこう、やらねばならないことがある時の髪の毛の乱れというのは心を逆撫でてくるのか。」

「またしても顔の脇に手をやって耳の裏に引っ掛ける。」

「今度は掛かりが浅かったのか、逆再生のように戻ってしまった。」

「もう！ イライラする！」

「咲夜がキレた。」

「普段はどんなことがあっても冷静な佇まいを崩さない咲夜が。」

「それだけでどれほどストレスが溜まり、余裕が無くなってきたのかが分かる。」

「キッと顔を上げ、ちょうど拭いていた鏡台の鏡を見る。」

「不機嫌そうな自分の顔が写っているけれど、問題はそこではない。」

咲夜の髪の毛はかなり伸びていた。

忙しすぎてまったく切る暇がなかったのだ。

前髪は少し分けているからなんとかなっているが、きつと下ろしたら鼻の頭にかかってしまうだろう。

三つ編みはまあ、編んでいるから良いにしても、そこにまとめ切れなかった髪の毛が肩口ほどまで伸びている。さつきからこれが上げても上げても垂れてくるのだ。

座った目で美鈴の鏡台を見回す。

ふん、と何かを見つけた咲夜は手を伸ばす。

見つけたのは美鈴が普段使っているシュシュだった。

彼女は髪の毛が咲夜よりも長いだけあって、髪留めやかんざし、ゴム、シュシュといった、まとめるためのものを実はかなり持っている。

一つくらいいいだろうと何も考えずに拝借。

無造作に髪の毛をまとめ、シュシュを二回ほど回転させて縛る。

少し満足したのか、今度こそ掃除を再開させた。

憂（うれ）いの無くなった咲夜はいつも通りさくつと掃除を終わらせた。

そしてまた鏡台の前に戻ってきて、シュシュに手を掛ける。髪の毛がうつつとうしかつたので掃除の間だけと思つて借りただけだ、流石にずっと借りておくのは悪いと思つたのだ。

無心で掃除をして部屋が綺麗になったので幾らか気分がすっきりして冷静さを取り戻したというのもある。

シユシユを抜こうとして掛けた手が止まる。

「そういえば美鈴ってば本当にいっぱい持つてるのね……」

落とした視線の先——先程は無造作に「コレ」を取ったのだけれど、よくよく見れば髪留め等が本当にたくさんある。

髪の毛から手を離し、それらの一つ一つを見る。

勝手に見てしまうのもどうかとは思ったものの、咲夜が掃除するのに部屋に入っていることは知っているし、こうして表に出ているということは見られても良いということだろう。

勝手に解釈して、美鈴はどんな趣味なのだろうかと幾つかを手に取ってみる。

「ふうん……結構いい趣味してるかも」

あまり装飾性の無いシンプルなものが多い。色は彼女の髪の毛や長身に合わせて咲夜の趣味よりは若干派手目だったけれど、それでも悪くない。キツイ色合いではなく、上品な輝きを持つているものばかりだった。

「私より気にしているのかしら、ね……」

他のことならばジャンル問わず自分の方が勝っている部分が多いと思うが、こと髪の毛に関しては彼女の方が色々と気を使っているのかもしれない、と咲夜は思った。

自分は長い部分を二つ編みにしているくらいで、あとは普通の手入れしかしていない。リボンも特に拘りがあるわけでもない。

それに引き替え、思い返してみれば美鈴の髪の毛はいつも綺麗だった。

寝起きの時はボサボサであるものの、一旦部屋に帰って身形（みなり）を整えてきた時はいつもすつと流れるストレートが印象に残っている。それに加えて、こうした髪留め類。

咲夜はもう一度シュシュを触った。

「このまま借りておいたらダメかしら……まだ掃除は終わってないし、髪の毛また垂れてきたら邪魔だし」

咲夜が呟いた言葉は正しくはあっても真実では無かった。

言い訳として筋は通るけれど、自分の本当の気持ちから出た言葉ではない。

咲夜は……気に入ってしまったのだ。

このシュシュが、というだけではなく。美鈴が髪の毛を気にしているという事実、そういう彼女の性格、そして彼女が使っている道具そのものが。

今まで何度も目にする機会があったはずなのに、どうして今更とも思うけれど。

——美鈴の部屋はどんなだろう？

なぜか、不意にそんな疑問が湧いてきてしまった。

自分がここで働き始めてから何千回と訪れたこの部屋を知らないはずがないのに。毎日掃除

までして、隅から隅まで目を通してゐるはずなのに。

「こんな狭かつたんだ……あの子の部屋……」

ぐるりと見回すと、そんな言葉が漏れた。

いつもは掃除をするせいかやたらと色々な部分が目に付いた。そのせいで実際の間取りよりも広く感じていたのかもしれない。それに紅魔館はその広さを活かして、ほとんどの部屋が大きく作られている。

だから、美鈴の部屋もそれなりに大きいという刷り込みがあつたのかもしれない。彼女に関する意外な一面を知つたからなのだろう、この探求心は。この興味は。

本当に些細な切っ掛けだったのに、なんだかいつも以上に美鈴のことを知りたがっている。

「うん……逃避かしら」

本当はこんなのにんびりしている暇なんてないのだ。今年の終わりは確実に近づいてきていて、それまでに終わらせなければならぬことはごまんとある。

にも関わらずこんなにも悠長に他人の部屋なんかを眺めている。

これが逃避でなくてなんなのだ、と思う。

やらなければならぬことから目を背け、目先の新しいものに没頭する。

「でもま、後で『時』を止めながらやればいいか」

本当は疲れるし、まっとうに仕事をこなしたいのだけけれど。

でも、一度気になってしまっただけでどうしようもない。自分でも不思議に思いながら、咲夜はきよろきよろと辺りを見回した。

ぐるりと部屋を一周し、中央に置いてあったソファに座ってみる。

美鈴はいつも仕事が終わって部屋に戻ると、ここに座っているのだろう。

思ったよりもふかふかで座り心地の良いソファだった。

視線を脇に向ければ朝陽が柔らかく入り込んできている。

咲夜は眩しさに目を瞑り……そのまま気を失うようにして眠ってしまった。